

長谷川鉄工 冷凍機開発で100年の歴史 エンジ・コンサル営業力も磨く



小野 良二社長



狩野 剛一取締役

長谷川鉄工(社長・小野良二氏、本社・大阪市港区波除1-4-39)は1921年、国産第一号の冷凍用圧縮機として使用された横置単筒複動式圧縮機を開発した国内最古参の冷凍機メーカーであるとともに、冷熱プラントの設計・施工を手掛けるエンジニアリング会社でもある。近年はシステム開発に注力し冷熱の総合エンジニアリング会社としても存在感を増し、国内外の多様な製氷プラントや大型冷凍冷蔵倉庫などの冷凍冷蔵設備エンジニアリングで実績を残している。設立は1922(大正11)年だが、前身の長谷川鉄工所として創業したのは、先人の記憶の限りでは1910(明治43)年ごろとされ、既に100年以上の社歴がある。現在、

近畿冷凍空調工業会(近冷工)の理事会社名を連ねる。今年創立70周年を迎えた近冷工創立当時の副理事長を務めてきた。70年間、近冷工と足並みをそろえ、深いかわりを持つてきた。

超低温分野で活躍する冷凍機の開発・製造を得意とする同社は、冷熱プラントでは-15度Cから-70度Cまでの温度域を広い範囲にカバーする。顧客の業種、業態に合わせた製品・システムを顧客要求に基づきカスタマイズを加えて提供する。省エネ、省人力、省スペース、高品質を実現し、顧客施設のコスト削減と環境対策を講じながら、付加価値の高い冷熱プラント技術を提供している。

とりわけ船用分野で同社が誇る強かつシンプル構造でメンテナンス性に優れるVZ型・VE型などの冷凍機が高評価を得ている。マクログループ向け船用冷凍機分野では、世界シェア推計トップのポジションにある。2007年には、経済産業大臣表彰(世界規模の市場で高いシェアを有する製品を製造する企業)として「元氣な中小企業300社」にも選定された。

長谷川鉄工の2009年・18年の歩みは「まさに激動の10年であり、また大きな変革を断行したことを契機に、進化に向けての歩みを進めた(小野社長)期間であった」と言える。冷熱エンジニアリング事業を従来手掛けてきた海外だけでなく、停滞気味であった国内でも本格展開するようになった。産業用レシプロ式冷凍機製造事業と双璧を成す事業部門へと成長させてきた。多彩な冷熱システムを独自に開発し、施工実績を積み重ねていく。冷凍機、冷熱エンジニアリングの両事業とも

国内展開はもちろん、戦前より進出してきた東アジアやASEAN(東南アジア諸国連合)地域への活動を加速させ、グローバル展開を図る動きを取ってきた。

社内では13年10月、大手住宅メーカーの営業畑を長年歩んできた小野良二氏が取締役から社長に昇格。トップ交代と社内若返り体制を築いた。半面、近冷工副理事長として長年会務に携わった先代社長の長谷川誠司氏が14年6月、病氣療養先の病院で死去し、一時代を築いたトップを突然失うという惜別も経験している。

約100年に及ぶ歴史の中で、同社は冷凍機技術を蓄積してきた伝統を重んじるあまり、逆に言えば「技術さえ持た合わせていけば、お客さまに製品を買ってもらえるというおごりが社内にはあった」(小野社長)。このため改革推進派であった先代の長谷川氏の遺志を受け継ぎ、小野社長も同様に14年以降、さまざまな改革を断行してきた。まず役員若返りによって、若手技術社員や若手営業社員の声を役員がしっかりとキャッチアップし、モノづくりやコンサル

ルディング営業に生かす体制を整備した。「旧来の組織体制下では、当社社員の最大の特長である技術力と実直さを生かした商品開発や営業展開を十分成し得ていなかった。特に若手社員の意見具申を軽んじる風土があった。私の代になって、若い世代の発想や意見を積極的に取り入れることを意識した」。小野社長はそう話す。

変革の中、冷熱技術がさらに磨かれていったことは間違いない。冷凍機開発では、VZL31型の後継機種として8シリンドアタイプのVEM型を商品化し、ラインアップを拡充した。冷凍機製造拠点は07年に尼崎臨海工場(兵庫県尼崎市)を新築したことで、従来の本社工場から生産拠点を完全移転し、生産ラインと設備を増強した。現在、

最大で年産約500台の産業用レシプロ式冷凍機を製造できる体制を整えるまでに至った。

冷凍機開発と合わせて「制御を含むシステム技術を加味したアプリケーションの開発にも注力してきた」(狩野剛一取締役)技術生産統括部長。09年・13年にかけて先代社長である長谷川氏の発案のもと、インバーター制御技術とシステム制御技術を融合した「産業用冷熱省エネシステム」、ア

ンモニタ漏えい発生時の事故防止策を講じた「ア」ンモニタ・ディテクト・リカバリーシステム、製氷・貯氷された角氷を全自動で砕氷して必要量を供給する「全自動給氷システム」などを新たなアプリケーションに加え、小野氏のトップ体制下では、若手社員の意見を吸収し、顧客要求を満たすアプリケーションの開発をさらに加速させた。

直近5年間で、アンモニタとCO₂を組み合わせた高効率自然冷媒冷却システム「NICRES(ニクレス)」、自然対流冷熱空調業界に個性的な光を放つていく構えだ。



尼崎臨海工場の外観

システム「ゆらぎ3・0」、高効率太陽除湿空調システム「DEMS(ディームス)」を商品化した。ブランド展開に着手した。3ブランドのアプリケーションを柱とし、地球環境や安全性に配慮しつつ、入庫品の品質保持に寄与する多様な工夫をそれぞれにシステム設計上で施した。これにより3アプリケーションとも顧客から好評を博し、採用に至る事例が増えている。

営業サイドでは「受け身の営業ではなく、攻めの営業の意識を強く持ち、取引先の機械室よりも、社長室でファイナンス面を含めたプレゼンテーションを行う営業社員らが実行に移すようになった。技術・営業とも、各部門が個々の発想や判断を生かしながら、責任を持って組織体として機能している」と小野社長は手応えを語る。

設立起点で見た場合、2021年に同社は設立100周年を迎える。3年後、さらに進化した長谷川鉄工の実像を伴った姿で記念年を迎えるべく、同社は一層の企業成長を目指す。今後も目的に最適化した冷凍機とアプリケーションの提供で、冷凍空調業界に個性的な光を放つていく構えだ。

コールドチェーンを支える低温各社